
告白ワンデー！

幸町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白ワンデー！

【Nコード】

N5678T

【作者名】

幸町

【あらすじ】

「甘いもんがほしい」今日は兄の友人の誕生日。会う約束を無理やりさせられて、しぶしぶ彼のアパートに向かったら、なぜこのような展開に？押し倒されなんとか逃げるわたしを、彼は追う。更新は不定期で、2、3話完結予定です。

午前の様子見

○

10:36 a.m.

開店して間もなく、ケーキを買う。

金銭的にホールではなく、ピース。

うん、カットかも？横文字って難しいな。

ケーキの数え方はともかく、何種類かのケーキ、プリンを買って、少し古いアパートに向かう。

わたしの家じゃない、兄の友人の家。

本当は逃げたいけど逃げられないの。

嫌な約束を無理矢理させられたものだから、わたしは仕方なく。

行くのも嫌。

ここにいるのも嫌。

ピンポンするのなんて嫌。

ましてや、このひとの前にいるなんて……嫌。

「んあ、おはよう？」

気だるげな彼は起きぬけらしく、あくびをしながら挨拶をする。

髪はボサボサ、不精髭。

何度も着ているからか、ゆるくなっているTシャツと毛玉がついて
いるジャージ。

「おはようございます」

それと、誕生日おめでとうございます。

プレゼントのケーキを渡すと、彼がきよんとしている。

「何これ」

「ケーキですけど」

「んんっ?……俺言っただけ」

「甘いものがほしいって言いませんでしたっけ?」

彼が何を考えているか、わからなくて顔を見上げる。

兄が意地悪するときの顔そっくり。

彼のその笑った顔は、好きじゃない。

○

11..24 a.m.

場所は変わって女友達の家。綺麗なアパート。

ローテーブルに、今は上半身を預けた状態で、うつぶせるだけ。

やめろテーブル壊れると言って、ここに住んでいる主にぺしぺし叩かれるのは仕方ない。

もともと呆けた頭^{はよう}が、さらにおバカさんになるぐらいなもの。

「何不貞腐れてんのよ」

ぺしぺし。

頭のネジは、今転がっているところ。

「だって」

ぺしぺし。

ネジはたくさん吹っ飛んで、山になっているところ。

「いいじゃない、あのひとダッサイし、やり方がイノシシみたいだけど、あんたに一途だよ」

「まりちゃんのばか！」

八つ当たりもいいところ。

ネジがなくなった頭は、爆発した。

飄々としているんだもの。

むっとするよ。

起き上ってマシガントークよろしく。

「む、無理矢理押し倒されるとか！ 朝にすることじゃないし！ あれは合意の上でするものでしょ！？ き、キスして、なんやかんやで『優しくする、大丈夫だから』って言われて、痛いけどわたし幸せ！みたいな感じになってさ！！ それなのに何でいきなりこんなめにあうの！？ わたし黒沢さんに悪いことした！？ いいえしませんが、してませんとも！！ それにそれで何でこうなったかわからないし！ もー意味わかんない！ 何なの、あのひと！！」

「突っ込みたいことが多々あるけど……まずさ、あんた少女マンガの読みすぎじゃない？ 実際は暗転とか、いきなり朝とかないからね？ お花たくさんとか光たくさんとかないからね？ 大丈夫？ ちゃんと現実見てる？？」

「わかってるよ、それぐらい！ まりちゃんのほうがどっぷり変なマンガにのめりこんでるくせに！ どんだけイタイって思われてるのよ、わたし！？」

「少女マンガに例えてる時点で十分よ、このイタイコ。……それにしても筋肉ダルマからよく逃げさせたね？」

「きんにくだるま？」

「黒沢さん」

「あ、ああ……って、黒沢さんは筋肉ダルマなの？」

「筋肉質で横も縦も熊みたいにでかけりや十分そうだって、あのさ……話を反らさないでくれる？」

「ごめん……えーと、ほら、うん」

「何？もう醜態さらしたんだからイラッとするんだけど、変なところで照れられるとかイラッとするんだけど」

「うんごめんなさい……わたし、ね。ほら、石頭だから……」

「ああ、そういうこと」

「なんかアリスさんの歌思い出すよね？　ごつつんこ」

「セック」

「わーわーわー！　だめ、女の子がそんなあからさまなこと言っちゃー！！」

「……情事前に、そんなこと考えるかね？　あんた」

「暴れて慌てて逃げてきちゃったけど、大丈夫かな？　黒沢さん」

「だから話を……いいや、もう。てか、犯そうとした相手を心配するかフツー？」

溜め息をついた、まりちゃんは脱力したようだった。

「もうお前らしい加減くっつけよ」

なんていう、まりちゃんの小さな悪態に気づかないわたし。

なおもただただしゃべるだけ。

○

12..47 a.m.

まりちゃんと、ひとしきりおしゃべりした後。

ご飯を食べようということで、まりちゃんの家近くの大きな商店街にある、飲食店に行く。

そしてまたおしゃべり。

「見つけた!」

後ろから大きな声が聞こえてきたので、ふりかえる。

思わず二度見。

……。

もとの姿勢に、勢いよく戻す。

「ままままりちゃん!？」

「買収されたので、はめてみましたけど?」

「まりちゃんのばかあああああああ!!」

逃げよう。

とにかく逃げる。

逃げなきゃならない!

「後で払うから、ひとまずごめん!」

「利子付きで返せよ」

「このしゅせんど!」

そう言い残して走って逃げた。

彼から捕まることがないように、一刻も早く、逃げなくちゃ。

午前は様子見（後書き）

別作品を考えるあまりの逃避からか、ピコンと思いついてしまいました。

えーと、まず自ら罠に行こうとするウサギちゃん（笑）がうまく脱兎したその後……というのが今回の話でした。

次回は茂みに隠れて獲物を見つめる飢えた獣が、捕まえようとする話の予定です。

午後の畏にご用心（前書き）

いくらなんでも更新がのんびりですね、反省。

午後の買にご用心

○

01..29 p. m.

走って走って、走りきって、早くも息切れだ。

今は川沿いの道を歩いているところ。

このまま行けば大通り商店街。

その近くにある、品揃えがいいと思っている本屋が頭に浮かんだ。

買いたい本があったことを思い出し、逃げ回るついによってみたところだけど、行ってもものんびりできないだろうと、あきらめる。

よくわからないけれど彼は、わたしの居場所がわかるようで、何故か“偶然”会う、会ってしまうことがよくある。

それだけでなく知らない彼の知人たちに声をかけられ、そしてその後、わたしは彼に捕まることもしばしばだ。

……油断できないな、と思う。

大通り商店街をぬければ駅に着くから、とりあえず、目的地は駅として。

息を整えつつも、わたしは駅に向かおうと歩き続ける。

落ち着きをとりもどしたところで、さきほどのことを思い出していた。

口が動かない代わりに、頭は余計に働くようだ。

食べかけのスパゲッティがおいしい。

ひき肉たっぷり、具だくさんのミートソース……。

微妙な汁気具合がとてもおいしかったのに、黒沢さんのあんちきしょう。

残ったスパゲッティはどうなったんだろう。

まりちゃんにしてやったり顔が、どこかにくい。

だらしなかった朝とは一変した彼が、一番にくい。

すこーしだけ。

ほんのちよっと。

格好良く、洒落た服装をしている彼に。

心臓がはねただなんて、嘘だ。

絶対、気のせい。

○

02..10 p.m.

携帯電話の着信音が鳴ったと気づいて、相手は兄だった。

顔を思い浮かび、しばらく携帯電話に表示されている兄の名前である文字を睨む。

しぶしぶ電話にでると、案の定、兄の声が聞こえてきた。

いつもと何だかテンションが高めのようで、ちょっとおかしい気もするけれど。

『おい何だよ、早く出ろよー』

「……気づかなかったんですよー」

『棒読みで言われてもなあ、ええ？　オイ』

雰囲気は穏やかなものの、兄の凄んだ声が少し怖かった。

帰ったら何をされるのか。

パシリならまだいいほう。

イタズラか関節技か……されたほうはたまったもんじゃない。

想像して体が思わず震える。

兄の言葉に、どもりながらも間髪いれず謝った。

兄は、気にしない様子だった。

『いや……別にいいけど、で？　今、どこにいる？』

「え、今？　おおど……何で？」

『いやいや、ただ気になっただけ。……大通りでいいのか？　大通りのどこ？』

「……え、迎えに来てくれるの？」

『ああ、いいよ』

ふいに何度も何かを叩く音が、笑う兄の声と共に聞こえてきた。

兄はそれに対して、やめろと言う。

まさか。

「……誰か、いるの？」

『ん？　ああ、友達トモダチ。遊びに来てて今送るところで、まあついでに？　お前迎えようかなあって』

いつもであれば、わたしが知らなくとも名字なり名前なりを兄は言う。

口数も妙に多いような。

怪しい、と思う。

「あの、もしかして……く、黒沢さん、いる？」

『黒沢ア？ ……いないけど、どうした？』

「いや、あの……ええつと……」

『ブハ、もうだめ』

『おい、もうちょい静かにせえよ！』

ギヤハハハハと大きく笑う声を諫める兄。

何だろう、何か違和感がある。

わからないけれど、その笑い声にひどく不快感を持った。

「……オニイサン？」

『は、はい？』

焦りをにじます、兄も兄で不愉快だ。

「ごめん、やっぱ迎えいらない」

『は？』

「お母さんには夜までには帰るよーって言ってて」

『え、ちょ、ま』

「じゃーね、バイバイ」

その後、何かを言おうとしている兄を無視して、ぶちりと切った。
珍しく兄は、何度もわたしに電話をする。

しつこく感じて、ついには携帯電話の電源も切る。

黒沢さんはいないと言っていたけれど、あれはいた様子だったみたいで。

「……………うそつき」

怨むように、わたしはぽつりと呟いた。

○

3..43 p. m.

兄に大通り（途中しか言っていないけれど、まるわかりだったように癪だ）と言ってしまったことに、後悔。

どこ行こうとも、見つけられるのも時間の問題だろうと思う。

駅にも、行けないかも。

でも大通りにもいられない。

どうしようかなあと、頭の中で地図を描く。

友達が駄目だったら。

久しぶりに、いここに会うのかもしれない。

我ながらナイスアイディア！

なんて自画自賛したところで、連絡しようと思っても携帯電話は恐ろしくて電源を入れられない。

……。

いまどきあるのだろうか、公衆電話を探してみる。

あたりをうかがったところでないし、しばらく歩いてみてもない様子。

公衆電話って、もう貴重だ。

……あー、いや百貨店に確かあったはず。

あったかも？

行ってみようか。

○

04:01 p.m.

公衆電話、発見。

思わず、おお！と感嘆をあげる。

本当にあったーって、ちよつと感動。

ただ。

いとこの電話番号わかんなくて、結局、携帯電話の電源入れなきゃなんないって、意味、ないよね。

わたしのほか。

公衆電話、探した意味ないじゃん。

しぶしぶ、電源を入れてみた。

兄、まりちゃん、それからアキラちゃんという友達が、電話やメールでいっぱいになってる。

兄とまりちゃんのメールは、今どこにいるか何をしているかと似たり寄ったりの内容だった。

他の友達のメール内容に疑問をもつ。

『黒沢サンが心配してる』

アキラちゃんは、何をどうしてそう、こんなメールを送ったのかな？

もしかして、友達みんな黒沢さんの味方、とか？？

うーうーわーうー、そうだったらいーうーやうーうー。

電話もメールも、申し訳ない気持ちになりながら、けれど返信も何

もせず、電話帳にあるいとこの名前をわたしは探した。

電話をかける。

『はいはい、もしもしー?』

「かいちゃん?あのーわたしだけど」

『あ、わたしわたし詐欺は間に合ってますんでー、じゃあ』

「え、いや、あの」

『冗談だよ、じょーだん。わかってるよー珍しいねーどうしたん?』

「あの、今、ヒマ? 家行^{うち}ってもいい?」

『んー甥がいてもいいならいいよん』

「やったーえっとねーたぶん1時間後には着くかも」

『へ? あんた今どこにいんの?』

「大通り近くの、百貨店」

『もしかして歩いてえ? バスカタクシー使いなよーそこはー』

「えー、うーん……そうするー」

『うんじゃあ、今からだ遅くても4時半?』

「たぶん？ バスだったらそれより遅いかもしれないけど」

『あ、そっか。まあ、気長に待ってるよん』

電話を切ると、タイミングがいいのかわるいのか、着信音が鳴った。相手が誰か確かめもせず（ばかだった）、思わずそのまま電話を受け取る。

「はい」

『やっとでたな』

「あ」

兄だと思い慌てて、そのまま電源を切ってしまった。

気づいた時には、時すでに遅し。

やばい。

今、電話をしても怒るだろうし、そのまま黙ってても怒るだろうし、何にせよ結局怒られることは確かだ。

うわあ、ぞっとする。

どうしようとしばらく、どうしても挙動不審になってしまう。

……お、お土産買って、機嫌をとろうかな！？

午後の罾にご用心（後書き）

午後というからには、01..00 p.m. ~ 06..59? p.m.
くらいまでかなあと思ったのですが、思ったより長くなってしまっ
たため、一端ここで区切りとさせていただきます。

さて、次回は夜です。

獣はウサギちゃん（笑）を捕まえるために画策中。

どんどん遠退いているようですが……どうなることやら（＾ω＾）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678t/>

告白ワンデー！

2011年9月5日15時08分発行